

現代詩を代表する詩人である吉増剛造は、昭和十四年二月二十二日東京で生まれた。同十九年、父親の郷里である和歌山市に疎開、同地で国民学校に入学、終戦を迎えて福生に帰り、一小に転入学、啓明中学、立川高校を経て慶応大学文科を卒業。

詩集 『出発』(一九六四 新芸術社)、

『黄金詩篇』(一九七〇 思潮社)、『頭

脳の塔』(一九七二 青地社)、『王國

(一九七三 河出書房新社)、『わが悪魔

祓い』(一九七四 青土社)、『草書で書

かれた、川』(一九七七 思潮社)、『熱

風』(一九七九 中央公論社)、『青空』

(一九七九 河出書房新社)、『静かな場

所』(一九八一 書肆山田)、

散文集 『朝の手紙』(一九七四 小沢

書店)、『わたしは燃えたと蜃気楼』(一

九七六 小沢書店)、『太陽の川』(一九

七八 小沢書店)、『螺旋形を想像せよ』

(一九八一 小沢書店)、その他に評論

集『透谷ノート』(一九八一 小沢書店)

等がある。

文学の中の福生

2

吉増剛造

『太陽の川』

菅井憲一

まれているのですが、今回はそのうち『太陽の川』を紹介しましょう。『太陽の川』は、詩とも散文とも言える文章で語られています。中でも「多摩川の川辺で水遊びをしながら、「ときおり福生の実家に帰るとき」、「自覚的に詩を書きはじめたのは」の三編に福生との係わりが細やかに描かれています。

「わたしは福生に生れた福生っ子と言えないかも知れません。というのは戦後すぐに父の故郷の疎開先の和歌山から移ってきて、終戦の年に小学校は福生第一に入ったのです。けれども少年期に焼きついた風土と福生の空気からは生涯逃れられぬよう、いわゆる

『福生っ子』とはちがっても変種の福生っ子とも言えるのでしょうか。」自分の生まれ育った土地は、住み続けるにしても、離れて生きるにせよ、日本人にとってはふるさとという感慨を以って省みられ、郷愁、悔悟、慙愧、いたまし、おもはゆきなどを想起させます。子供時分の家族のこと、それを取り巻く土地の人々、生活や自然など様々な形で記憶と言う鮮烈な、あるいは模湖たるべールに包まれて思い浮ぶからでしょう。吉増さんは福生の町に対し「重荷になる程の思いの多さがある」とも述べています。

私が吉増さんに始めてお会いしたのは、昭和五十五年十一月一日、市立中央図書館にお招きしての講演会の時でした。その時の印象は『風の又三郎』と重なるものがありました。九月一日の新学期に突如として山の学校に入って来て、二百二十日の風の日を消した又三郎を見た思いがしました。あるいはこんな印象が土地っ子の中にもあり、奇異な目で見られたのかもしれない。いじめられて背中に投げられた石の重さと痛さも忘れら

文学の中の福生 2

れぬ事のようにです。

吉増さんにとっての福生について触れてみます。子供の頃の思い出として、キヤサリン台風後の洪水の多摩川に飛び込み泳いだことを再三語っています。濁流の渦巻く川に潜り目を開けて見ると、砂塵が黄色く舞い先は何も見えぬ川だったという強い印象を受けたようです。日頃青々と流れている多摩川は一変し、普段は見えないもう一つの多摩川を見たのでした。これが川の下にもう一つの川が流れているというイメージに定着します。また五日市の川原でのウニの化石の発見や福生周辺の地名、呼称(多摩川、熊川、加美、志茂、停車場、山の神、十二天、まいまいず、川欠けなど)が作品の中にしばしば使われるのを見ますと、福生に關わる言葉を通して歴史を溯り、土俗的な世界へ下降して行く様子を見て取る事が出来ます。過去の意識に向うタイムトラベルへの渡船場は福生にあるのでしょうか。

心に思い描く世界は、現実世界から飛翔するものです。従って記憶を辿ること

は、非現実世界、異界、彼岸、つまり想像世界へ渡ることを意味します。「わが心宮の奥には一軒の古びた写真館がある」と述べるように、記憶を思い起して想像世界にあるものを作品化して行く方法が言葉となり、文章となって表現されたとき、詩や散文となるのでしょうか。福生は一般的なふるさととしてのなつかしさだけでなく、記憶を通して幼少年期の体験から更に、心の奥底にあるものを辿る回路の意味を持っています。従って福生は想像力の源泉にもなっているのです。

日本の近代思想を学ぶ人にとって、北村透谷(明治元年〜同二十七年)を避けて通ることは出来ません。詩人でもあった透谷は、自身が負った近代の苦しみを評論、日記、書簡、詩に残しています。透谷の足跡は八王子を中心として多摩地方の各地にあります。福生でも俳人森田友昇が透谷と関わりがあったことを昭和三十五年刊の『福生町誌』は初めて紹介しています。

友昇は、「その生涯を通じて娶らず、

酒を愛し、旅を愛した。そして明治二十七年飄然として行脚の草鞋を履くや、行雲流水と共に還らず、数奇な運命を辿ったという。友昇の俳諧の道での弟子・北村透谷は明治二十六年十月自殺をとげている。その自殺がなんらかの影響を師、友昇に与え、それで、友昇も飄然と旅のぼり、そのあとを絶ったのではないかも考えられる。」^注

この一節が森田家にある友昇塚の案内としてかつて福生駅に置かれていたのですが、吉増さんが「日本の近代詩の原点が透谷にあることに気がついて、読みなおしはじめて」透谷研究に取組むようになってから、子供の頃これを読んだ印象が不思議に思い起されたそうです。北村透谷に向う吉増さんは、研ぎすまされた感覚で透谷の言葉を咀嚼し、自分の言葉を重ね合わせて解釈して行きます。透谷の心宮に入り込む方法は詩人対詩人であった時始めて可能だったと言えます。これが異色の透谷論としてまとまっていますし『太陽の川』でも書かれています。透谷は始めて日本の近代化にまともな立場を持った思想家と言われていますが、小田

原藩の幕臣の家に生まれた透谷の血肉となっていた教養は、江戸文学、俳諧、漢詩文など江戸文化の色濃い伝統的なものでした。勿論キリスト教、民権思想、英米文学と言った西欧の影響も強く受けるのですが、庶民文化でもある江戸文化を中心とする日本の伝統的なものを高く認めていた事は特筆されるべきことです。

吉増さんの透谷への傾斜は、透谷の著作を通して日本の近代化の陰に陰れがちな日本人が代々受け継いできた歴史意識に注目し、そこから更に忘れ去られた日本人の歴史の古層を辿ろうとしています。それは歴史学者の行う実証的研究方法でなく、詩人の直感としてつかみ取ろうとするものです。このことが記憶の中の福生を辿る思考と重なり合うのです。

『太陽の川』からは以上の様に、吉増さんの記憶の中のあるさと福生が、詩作の原点であり、歴史意識の原点になっていることを理解することが出来ます。読者にとって難解と見られがちな作品も、福生をキーワードにすれば、読者それぞれの理解と見方がけぬ発見があり、思考の冒険が可能だと思います。最後に吉増さ

んの美しい文章を紹介します。

「だからこれからもきっと「みえない福生」が形をかえ姿をかえてわたしの感覚を襲うということがあるのだとおもいます。「みえない福生」あるいは「幻の福生」と書いて、ああ、これは「福生」という名にふさわしいなと瞬間気がつきます。きっと「出身地は？」と問われて、しきりに「幸福の福」と「生れる」です。それで「フツサ」と読んで……と説明しつづけてきた記憶の糸とつながっているのだとおもいます。わたしが詩が書くからなのでしょうか、この「フツサ」には不思議な響き、古代からの詩的な糸のつながりが感じられているのです。

注（この文章は、森田家の当主であった森田殷史氏からの聞き取りと、昭和三十年九月刊『透谷全集 第三巻』（岩波書店）の年譜（五八九頁）にある内容からの推測で書かれたものと思われるが、その後発表された小沢勝美氏の論考によって明らかなように、透谷の俳諧に影響があったのは交流の深か

った八王子川口村の秋山国三郎と見る方が自然である。なお透谷の死は明治二十七年三月十七日のことである。）

（すがい・けんいち 福生市史近代調査員）